

第 5 回

『ケンペルの見た徳川ジャパン』

ヨーゼフ・ライナー編、六興出版、1992年

今回取り上げる本は、1992年に六興出版から発刊された『ケンペルの見た徳川ジャパン』です。ヨーゼフ・ライナーが編者となっていますが、紹介するのは、その中に掲載されているいくつかの論文のうち守屋毅氏の「ケンペルの見た元禄の社会と文化」という論文が中心です。

今回ケンペルのことを取り上げるのには理由があります。ケンペルは実際に日本にやってきて、2度も江戸まで参府し、五代将軍綱吉にも謁見を許された特異な外国人なんです。その経験をまとめた著作がヨーロッパの人々に大きな影響を与えました。ゲーテ、カント、ヴォルテール、モンテスキューらも愛読したと言いますし、日本史の教科書に出てくるドイツ人医師シーボルトやアメリカのペリー提督にも多大な影響を与えています。

shut up the country

ところで、ケンペルって覚えていますか？

もし、あなたが受験生なら、絶対におさえておかなければならない外国人ですよ。山川出版社の教科書『詳説日本史』には、ケンペルのことを次のように紹介しています。

ドイツ人医師ケンペルはその著書『日本誌』で、日本は長崎を通してオランダとのみ交渉を持ち、閉ざされた状態であることを指摘した。1801年（享和元年）『日本誌』を和訳した元オランダ通詞志筑忠雄は、これを「鎖国論」と題した。鎖国という言葉は、以後、今日まで用いられることになった。

江戸幕府の外交政策として有名な「鎖国」ですが、幕府が言い出した言葉ではなかったのですね。『日本誌』のオランダ語第二版をもとに、オランダ通詞の志筑忠雄が、題名があまりに長いことから文中に適当な言葉を探して、「鎖国論」と名付けたのでした。「鎖国」という言葉の「発案者」が、志筑忠雄であり、その原著を書いたのがドイツ人ケンペルだったのです。

通訳の志筑忠雄も大切です。ほかに何をした人か、覚えていますか？

彼は『暦象新書』を著して、ニュートンの万有引力説やコペルニクスの地動説を紹介するなど、化政文化期に活躍した人ですね。

ケンペルって、どんな人？

ケンペルという人は日本に來ただけではありません。現在の国名で言えば、スウェーデン、ロシア、アゼルバイジャン、イラン、インド、タイなどに旅行しています。最初にペルセポリスの遺跡について記録したヨーロッパ人の一人でもあるそうです。彼はタイを経由して1690年（元禄3年）にオランダ商館付の医師として日本の土を踏みました。それから、約2年間出島に滞在し、1691年（元禄4年）と1692年（元禄5年）の2回、江戸参府を経験し将軍・徳川綱吉にも謁見しています。日本滞在中、オランダ語通訳の今村源右衛門の協力を得て精力的に資料を収集していきました。

1695年、12年ぶりにヨーロッパに戻ったケンペルはオランダの大学で学んで医学博士号を取得し、医師として開業します。大旅行で集めた膨大な収集品の研究に取り掛かったのですが、仕事などが忙しくなかなかなかどらなかったようです。

1712年、『廻国奇観』が出版されました。この本の大部分はペルシアについて書かれており、日本の記述は一部のみでした。『廻国奇観』の執筆と同時期に『日本誌』の草稿である『今日の日本』の執筆にも取り組んでいましたが、残念ながら1716年、出版を見ることなく亡くなりました。その後、ケンペルの遺品の多くは熱心な収集家に売られたそうです。

このあたりのことについて、『ケンペルの見た徳川ジャパン』のなかで、次のように触られています。

ケンペルが日本で見聞したことについて、まとまった紹介である『日本誌』と『廻国奇

観』とは、ヨーロッパに大きな反応を起こすことになった。『廻国奇観』はラテン語で著されているが、これはもちろん教養のある人に読まれ、理解されたと考えられる。『日本誌』は最初、スイス生まれの医者ショイヒツアーの手によって英語に訳され、1727年にロンドンで出版されてから、その2年後には早くもアムステルダムでオランダ語版が、さらに4年後には再版されている。フランス語版はやはり1729年に出版されて・・・1749年に独訳された。

ラテン語、英語、オランダ語、フランス語、ドイツ語などに翻訳されていることは、それほど多くの人々に読まれたということです。また、『日本誌』は、フランス語版の出版が実現したことや、ディドロの『百科全書』の日本関連項目の記述が、ほぼ全て『日本誌』を典拠としていたことなどにより、多くの知識人の間で広まっていきます。ゲーテ、カント、ヴォルテール、モンテスキューらも愛読し、19世紀のジャポニスムに繋がっていったそうです。

『ケンペルの見た徳川ジャパン』の続きを見てみましょう。なんと、この本を、どんな人たちが購入したのかがわかるんだそうです。

この英語版とドイツ語版の読者については幾分知ることができる。なぜならば、当時このような大きな本を出版する前には、その予約注文が取られ、しかもその予約者の名簿を初版に印刷する習慣があったからである。英語版の予約をした人として162人の名前がわかっている・・・ドイツ語版を予約したのは246人であった。

えっ、英語版でたったの162人？ ドイツ語版で246人？ これでは、出版しても元が取れないのではないか、と思うのですがどうでしょう？ 続けて・・・

販売予約価格は10ターラであった。当時の値段としては非常に高く、またそれだけの収入を得るには、大百姓の下人は10ヶ月間働かなければならなかった。

とあります。「ターラ」という単位はさっぱりなじみがありませんし、「大百姓の下人が10ヶ月間働かなければならない」値段ってどのくらいなのでしょう？ 大百姓の下人がどのくらいもらっていたのかがわからないので、現在の日本で考えてみましょう。

ちょうど、安倍内閣が「最低賃金を全国平均で24円アップさせて822円にする」という報道がされていますので、これを基準に考えてみます。最低時給が822円で1日8時間働くとすると6576円になります。週に6日働くとすれば、1週間で3万9456円。1ヶ月4週で計算すると、15万7824円になります。その10ヶ月分ですから、157万8240円ということになります。えーっ、150万円もするの?! びっくりしますね。だったら、160人くらいでも150万円で販売したら2億4000万円くらいになるので利益はありそうですね。もちろん、購入できる人というのは限られていて、医者や大地主、国家の役人などだったそうです。

ケンペルの影響を受けた人々

さあ、先に進みましょう。

シーボルトは1823年に長崎・出島に赴任すると、真っ先にこの薬園の片隅に、先駆者のケンペルやツーンベルクの業績をたたえる記念碑を建てた。それより50年の後、日本への遠征に出発したアメリカのパリー提督は、大シーボルトの著作を購入するとともに、ケンペルの本も大切に日本に携行した。また、明治時代には、タイムズなどのイギリスの新聞社が日本を解説する度に引用するのはケンペルの『日本誌』であり・・・。

言うまでもなく一八世紀の半ば頃から大量に編集された世界旅行記の全集や世界史の中の記述は、ケンペルの『日本誌』を資料として取り上げているか、あるいはそれを書き直しているのに過ぎない。・・・・・・。また、地図についてもケンペルの影響をそれとはっきり知ることができる。ケンペルは持ち帰ることができた4枚の日本地図から、ケンペル自身が編集した日本地図の下書き（現在、大英図書館に保管されている）を作成したが、この地図は『日本誌』に掲載されてから100年以上の長きにわたって定説となり、シーボルトが新しい資料を持ち帰るまで一般に適用していた。

ケンペルの影響はすごいですね。彼が日本で見たこと、経験したことなど、彼のペンを通してヨーロッパやアメリカの人々に伝わり、日本に対するイメージ（割とプラスイメージが多いように思います）をヨーロッパの人々に形成させていったんですね。

ところで、引用した中にシーボルトの名前が3回出てきました。シーボルトって誰ですか？ 何をした人でしたっけ？

シーボルトはドイツ人ですがオランダの陸軍軍医となり、日本にやってきました。日本にきた外国人は出島から出ることはできませんでしたが、町に出て診察することが特別に許可され、有名な「鳴滝塾」を開いて各地から集まってきた人たちに医学を教えています。

はい、ここで質問です。鳴滝塾でシーボルトが育てた人物を一人あげてください。

最も有名なのが高野長英ですよね。シーボルトの弟子の梅田幽齋に医学や蘭学を学んだのが大村益次郎になります。高野長英と言えば、1838年『戊戌夢物語』を書いて幕府の対外政策を批判した結果、永牢に処せられ、後に自刃した人物ですね。この事件を「蛮社の獄」と言いました。

シーボルトは、1826年に、ケンペルと同じようにオランダ商館長の江戸参府に同行します。旅の途中で植物や動物の採取をしたり、気温や山の高さをはかったりしました。また、多くの日本人が病気やけがの治療法や西洋の知識を教わりにきました。

江戸では、将軍や幕府の役人にあいさつをしたり、多くの医者や学者に会って知識や情報を交換しあったり、日本研究に役立てるための品物をもらったりしました。この旅行の時に集めた本や絵、いろいろな品物は、船でオランダまで送られました。シーボルトは、日本から帰った後に、調べたことを本で紹介したり、集めたものを博物館で見せたりしています。

ところがです。江戸参府のあとの1828年、いわゆる「**シーボルト事件**」が起こりました。シーボルトが日本調査のため集めた品物の中に、日本地図や将軍家の家紋である葵の紋付きの着物など、国外持ち出し禁止のものがあつたのです。取り調べが行われ、関係者は処罰され、**シーボルトは国外追放**となります。

このとき地図を渡したとして処罰された人物は誰でしょうか？

答えは、天文方の高橋景保でした。彼は蛮書和解御用で洋書の翻訳をしていきましたね。

ちなみに、高橋景保の父は誰でしたか？

高橋至時で、同じく幕府天文方でしたよね。至時に学んだ下総佐原の商人**伊能忠敬**が日本初の実測地図『**大日本沿海輿地全図**』を作成しますが、このコピーを景保はシーボルトに渡したといわれています。

ここで気がつくことがあります。日本は鎖国してしまったから、ヨーロッパの学問・文化の受容は、きわめて困難になったはずですが、ところが、上記のように蘭学やら地理学・天文学などが盛んになっているのがわかります。そして、幕末には「洋学」として著しい発展がみられました。

ところで、このようにして行われたヨーロッパの学問・文化の受容のしかたには、ほぼ一貫した特色が認められます。

第一に、八代将軍吉宗によって「**漢訳洋書の輸入の禁**」が緩和されたことをきっかけに、田沼時代を中心にヨーロッパの学問・文化の受容が活発となっていき、**医学や天文・地理学、兵学など実学的な分野**で発達しました。

第二に、朱子学を教学の根幹とみなす権力者も、欧米諸国の接近にともなう対外緊張の高まりのなか、**封建支配を維持していくための実用的な技術**として洋学を重視せざるをえ

ず、積極的な摂取を進めていきました。しかし、一方で、キリスト教的な要素は排除され、鎖国政策など体制への批判も「蛮社の獄」などで厳しく禁圧されていきました。

さて、帰国したシーボルトは日本で集めた資料や知識をもとに、日本についての本格的な研究書である『日本』や、日本の植物・動物を紹介する『日本植物誌』『日本動物誌』などを出版しました。また、日本の植物を栽培し、ヨーロッパに普及させました。

なお、シーボルトのその後ですが、国外退去から30年後、国外追放がとかれ、1859年（安政6）に再び日本にやってきます。長崎に到着したシーボルトは鳴滝に住み、昔の門人たちや娘・いねたちと交流しながら日本研究を続けます。そして、なんと幕府に招かれて、江戸でヨーロッパの学問を教えることになりました。3年後に日本を去り、1866年、ドイツのミュンヘンで70歳で亡くなったそうです。

ケンペルの著作は多くの外国人に影響を与えましたが、実は日本人にも影響を与えているのです。日本史の教科書に出てくる有名人で、『日本誌』や『廻国奇観』を読んだ人はたくさんいます。どんな人がいるか、想像がつかますか？

まずは一人目。寛政の改革を断行した人物と言えば・・・

そう、松平定信です。定信は必読書としてあげた4冊の中にケンペルの本を入れていたそうです。

町人学者で言えば、大坂の山片蟠桃で、彼は7両で購入したそうです。山片蟠桃は懐徳堂の出身で、『夢の代』を著した人でしたよね。

懐徳堂といえば、山片蟠桃ともう一人有名人がいます。『出定後語』の著者ですが、誰でしょうか？

そう、富永仲基でした。

また、国学者の平田篤胤がいます。平田篤胤の復古神道は、彼の死後も中部地方や関東で武士や豪農・神職にひろく浸透し、幕末に現実の政治を動かしていきましたね。その平田篤胤はケンペルを非常に評価したそうです。

さらに、吉田松陰がいます。叔父によって萩に創られた松下村塾で、吉田松陰は幕末や明治新政府で活躍する人物を数多く指導しました。残念ながら安政の大獄で命を落としました。彼も『日本誌』を必読書としています。

それでは、ここから**守屋毅氏の「ケンペルの見た元禄の社会と文化」**を見ていきましょう。

ケンペルが日本に滞在したのは、1690年からの二年間であった。1690年は元禄3年である。小説家の井原西鶴が浮世草子『日本永代蔵』を刊行したのが前々年、俳人の松尾芭蕉が『奥の細道』の旅に出たのが前年、という時代であった。

ドイツ人医師ケンペルがやってきたのは、ちょうど5代将軍綱吉の時代で、大坂を中心として経済が発展し、町人文化である元禄文化が花開いていたときだったんですね。

当時、日本に滞在する機会にめぐまれた外国人は、そうおおくはなかった。1630年代の方、幕府は海外との自由な交流を禁止する政策をとりつづけていたからである。そしてケンペルは、そのような日本の状況を<shut up the country>と呼び、その是非を最初に論じた人物であった。ケンペルの言う<shut up the country>は、1801年(享和元年)に志筑忠雄によってケンペルの『廻国奇観』の一章が翻訳されるに当たり、「鎖国」という訳語が与えられることになった。

ところで、ケンペルは日本の「鎖国」に関して、どう考えていたのでしょうか？ 鎖国について、良い政策だと思っていたのでしょうか？ それとも、悪い政策だと思っていたのでしょうか？ 彼は『廻国奇観』のなかでこのように述べています。

その国の位置と国柄によって外敵の襲撃に対して守りを固め、難攻不落の備えをなすような国でも、敵をも友をも共に閉め出す鎖国政策をとることは、そうすることによって他国と提携する共同社会を作るよりもさらに幸福な満ち足りた生活を営むことができない限り、徒勞に終わる。ところが日本人は、支配者によって鎖国令が布かれて以来、それを行いうることを実証し、我々もまた、この国の利益を特に考えてみると、誰でもなるほどと容易に頷ける節があるのである。

ケンペルは鎖国に対して悪いイメージを持っていないことがわかります。ケンペルの日本に関する知見は、2度にわたって江戸まで参府した「貴重」な経験によってえられました。

当時オランダ商館長は、1年に1度、長崎から江戸に行かなければなりません。それは将軍に拝謁するためで、この時『風説書』を提出しました。商館長一人で行くのではなく、1名もしくは2名の書記と1名の外科医を連れて行くことができました。

もちろん彼らだけで江戸まで行けるはずがありません。ちゃんと、護衛が「はりついて」いました。長崎奉行配下の護衛に見張られながら江戸まで行くのですから、ゆったりとした気分、旅を楽しむことはできなかったかもしれません。でも、普段、彼らの行動は広

さ131アールの出島の中に限られていて、また外から一般の日本人が入ってくることも禁止されていましたから、牢獄のような出島から出られたわけですから、少しは羽を伸ばせたかもしれません。そして何よりも、ケンペルにとって日本人や日本の文化、自然などを観察する絶好の機会になりました。

ちなみに、出島は扇形をしていて、上の辺が220m、下の辺が190m、両サイドが70mで、広さは131アールでした。ですから、出島の広さ(=1万3100㎡)は洛北高校のグラウンド敷地分(1万5000㎡)よりも狭かったんですね。

ケンペル、江戸に行く

さて、**守屋毅氏の「ケンペルの見た元禄の社会と文化」**に、江戸に行くまでの道中の記述があります。

まずは長崎から陸路で小倉に行きます。九州の北を横切るのです。小倉から下関まで小舟で渡し、大きな船に乗り換え、瀬戸内海の航路を利用する船旅で大坂に向かいました。

この海上には上下する大名やその家来ばかりでなく、また大部分は、ある町や国から他国に商売のために出掛ける国内の商人も頻りに往来するので、時には一日で百艘の帆船を数えることがある。

と記しています。しかし、**ケンペルは船旅には不満だったようです。なぜでしょうか？**

なぜなら、陸路なら日本人の社会や生活をつぶさに観察できるのに、**海上では風景を眺めるしかないからでした。** 徒歩なら、今の私たちよりも歩くスピードが速くても、植物にしても人々の生活風景にしても、観察するチャンスや時間は多いでしょう。しかし、海路では船のスピードは速いし、また船中で日本人と接触するチャンスがあっても時間は限られそうです。護衛という名の「監視」があるので、自由行動もできないですね。

それに対して、大坂から京都を経由して江戸までは、東海道を歩きました。もちろん大坂や京都にも宿泊しています。京都についてケンペルはどんなふうに書いているのでしょうか？

京はいわば日本における工芸や手工業や商業の中心である。(中略) それゆえ京都の工芸品は全国に名が通っていて、京の製品という名前さえ付いていれば、実際に出来栄が大変悪くても、他の品よりずっと好かれるということである。大通りには商家以外はほと

んどなく、こんなにたくさんの商品や小売りの品物に買い手が集まって来るかと、われわれは驚くほかはない。旅行者は誰もが自分か他人のために何かを買い込み、それを持って立ち去っていく。

京都が天皇の住む都であるということよりは、工芸の町で経済力豊かであることを書き記しているのがおもしろいです。確かに京都は天皇のいる都、宗教都市ですが、西陣織などに見られるように、なんと言っても江戸時代を代表する工芸都市でした。そしてケンペルは天皇には「会えなかった」のですね。

ケンペルは、東海道の宿場町や街道が非常に整備されていたり、治安が良かったりしていることに、非常に感心しています。日本の治安の良さや、おびたしい人たちが旅行をしていることにびっくりしているようでした。

この国の街道には毎日信じられないほどの人間がおり、二、三の季節には住民の多いヨーロッパの都市の街路と同じくらいの人々が溢れている。(中略) 一つにはこの国の人口が多いこと、また一つには他の諸国民と違って、彼らが非常によく旅行することが原因である。

われわれは、今日非常に多くの男女に出会った。大抵は歩いていたが、馬車に乗っている人も少しはあったし、時には一頭の馬に二、三人も乗っているのを見かけ、またいろいろな乞食もいた。これらの人は皆伊勢参りに出掛けたり、そこから帰ってくる人々である。

そして、やっとケンペルは江戸に到着し、ついに将軍綱吉への謁見が許されます。長崎を出発してから、江戸に到着するまで29日かかっていました。

われわれはあるときは立ち上がってあちこちと歩かねばならなかったし、ある時は互いに挨拶し、それから踊ったり、跳ねたり、酔っ払いの真似をしたり、つかえつかえ日本語を話したり、絵を描き、オランダ語やドイツ語を読んだり、外套を着たり脱いだり等で、私はその時ドイツ語の恋歌をうたった。

せっかく将軍様に謁見できて、将軍様や周囲の偉い人たちの様子を観察しようと思ったはずですが、平伏させられたり、将軍や偉い人たちの「要望」「注文」をきかなければならず、ピエロのような、芝居がかったことをさせられたようです。これでは、観察するどころか、観察されっぱなしだったようですね。

ケンペルたちが将軍の前でピエロまがいのことをさせられた「芝居」のことを、ある有名な外国人が1790年代に書いた論文の中でポジティブに見ているそうです。ある人とは、ゲーテなんです。ゲーテは「このような劇を通じて、互いの言葉がわからない外国人同士が大いに理解を深めることができるのではないか」と述べているそうです。

ドイツ人医師ケンペルが著した『日本誌』を元オランダ通詞志筑忠雄が「鎖国論」と題して、閉ざされた状態であると指摘したため、江戸幕府の外交政策は、「鎖国」と言われるようになりました。

でも、おかしいと思いませんか。ペリーがやってきて「開国」させられたわけですが、「開国」の反対なら「閉国」とすべきですよね。しかし、日本は国を閉じていたわけではありませんでした。日本から外国に渡航禁止だったにも関わらず、朝鮮には対馬藩の人々は渡航していますし、朝鮮からは通信使が来ています。オランダ商館長はもとより、琉球からの慶賀使や謝恩使も島津が率いて江戸まで来ています。全く「閉国」という状態ではなく、窓口は限定されていますが、開かれていました。

今回は「鎖国」に関する著作をまとめていく予定です。